

五島美代子第一歌集『暖流』

——作品配列の意味——

濱 田 美 枝 子

はじめに

五島美代子は、一九三六年七月、第一歌集『暖流』（三省堂）を刊行した。同歌集は一九一五年九月に一七歳で佐佐木信綱に師事してからの約二〇年間の作品群である。「プロレタリア歌人同盟」への参加、そこからの脱退を経験して作歌を断念した美代子が、一九三一年から二年間の滞欧生活の中で、自己の生き方に懊悩しながら歌人としての再出発の決意をするに至った過程が含まれている。

『暖流』出版前後の時代は、日本は軍部を中心とした全体主義国家へと移行していく時期であり、ナショナリズムの高揚、社会主義運動への弾圧、思想・言論の取り締まりが厳しさを増していった時代である。加えて、一九二七年に起こった金融恐慌やその後のニューヨークに端を発した世界恐慌等による日本経済の悪化によって、帝国主義日本の侵略戦争が拡大し、一九三一年には満州事変に始まる一五年戦争に突入した。それに伴い戦争を支える女性の力が求められ、一九三二年三月の「大阪国防婦人会」発会を機に銃後を守る女性たちへの美化、母性賞揚が国策によって押し進められ、社会に浸透していった時代である。そして、『暖流』出版年には、二・

二六事件が起き、以後、軍部が統制力を持ち、総力戦体制へと突き進むことになった。短歌においては、一九三二年一月には、プロレタリア歌人同盟（一九二八年の無産者歌人同盟から出発）が解散した。このような時代を背景に、『暖流』は誕生したのである。

この稿では触れないが、美代子には、文学史上、母の歌人、母性愛の歌人としての評価が定着している。それは、『暖流』において「胎動」と題する一五首を詠んだことに始まる。川田順は、この歌集に寄せた「序」において、美代子の歌には「全く新しい母性愛の発露」が見られると指摘し、「此處には、初めて胎動が歌はれてゐる」と述べた。川田は、社会の規範を担うに相応しい知的階級の家庭婦人である美代子の、新しい母性愛の歌を称賛した。『暖流』発刊年の一〇月、竹柏会編集部は『暖流』批評集（『心の華』竹柏会出版部）を編んだが、そこでは、新村出や本位田祥男をはじめ後井嘉一や花田比露思等多くの執筆者たちが、川田順の「序」に則って、美代子が近代の「新しい母性愛」の道を拓いたと評価した。

前述の時代背景を考えるなら、歌壇が母性愛の歌をクローズアップすることは、まさに時代の要請に適合していたと言える。だが、このような歌壇の評価は、はたして『暖流』刊行当時、美代子自身

が最も伝えたいと意図したテーマに合致するものであっただろうか。この点に関してこれまで論じられていない。

美代子は、『暖流』の作品群を「滞欧歌鈔」（昭和七・八年）・「帰朝後」（昭和九・十年）・「巢鴨の家 その一」（をとめなりし日に）・「巢鴨の家 その二」（大正十四―昭和三・四年）・「二段階」（昭和四・五年）と配列した。しかし、後に、一九六三年一月出版の『五島美代子全歌集』（短歌研究社）、一九八三年四月出版の『定本 五島美代子全歌集』（短歌新聞社）では、『暖流』の作品群は編年体に変更されている。この変更は何によるのだろうか。本稿では、第一歌集で『滞欧歌鈔』を冒頭に配し、「二段階」を最後に配したことに焦点をあて、刊行当時の美代子の意図を検討し、その意味を明らかにしたい。

一 既成歌壇変革の波

昭和初期は、プロレタリア文学運動が盛んな一時期であった。蔵原惟人は、戦前は日本でも「だいたいにおいてマルクス・レーニン主義の思想的立場に立ち、共産主義の運動を支持する作家たちの運動として発展した」と記している。一九二五年一月に「日本プロレタリア芸術連盟」が結成され、分裂・抗争に至り、一九二八年三月、「日本無産者芸術連盟」（ナップ）が結成された。

このプロレタリア文学運動の波は、歌壇にも及んだ。一条徹は、一九二〇年二月の日本社会主義同盟の成立によって「労働者階級と知識人が思想と行動の面で結びつき、「のちのプロレタリア文学運動の発展に、画期的な意義をもった」と述べ、昭和における短歌革命は「内容変革の問題」であることを指摘している。その先陣を切ったのが、大塚金之助や石樽（五島）茂である。経済学者で『ア

ララギ』の同人であった大塚金之助は、一九二七年一月創刊の『まゐるめら』の第五号（同五月）に「無産者短歌」を発表し、「無産階級は唯物論の立場に立ち、歴史をも社会をも芸術をも唯物論的階級的にみる。短歌の如何にと何故にとを物質的基礎から説き、全被壓迫無産階級解放の熱情に基いて、その短歌は革命的、集团的、進出的であり底力を持つ」と、プロレタリア短歌の方向性を明確にし、「階級意識だ！ 先づ何より自ら無産者意識を持つのだ！」と、無産青年たちの意識を鼓舞した。

茂は、東京帝国大学文学部の聴講生であった美代子と東大短歌会で知り合い、一九二五年五月二日に結婚した。茂の存在は、歌人美代子にどのような影響を及ぼしたのであろうか。

ロバート・オーウェンを中心とする一八、九世紀のイギリス社会経済史の研究者であった茂は、島木赤彦に師事し、「麦人」、「小杉茂」の雅号で一九一九年二月から一九二四年二月まで『アララギ』に作品を発表した。と同時に、『心の花』創刊時からの編集者である石樽千亦を父に持つ茂は、『心の花』の編集を手伝い、自らも作品や批評を掲載し、選歌に携わるなど、若手歌人として評価を得ていた。

茂は、資本主義社会の枠内でその矛盾点を是正しようとするロバート・オーウェンの社会変革の方法論を応用し、揚棄という発想の下に既成歌壇の変革を試みた。一九二八年二月から二月まで『短歌雑誌』に、「短歌革命の進展（その一）」「（その八）」（七・八月号は除く）を連載した。（その一）の「はしがき」で、「社会不安の空気」が、歌人たちに従来自己の依拠する現実観の根本的変革を要求することにより、彼らを動揺させている点を指摘し、「この動

揺の味解の上に立ち、しかも動揺すらを越ゆる「詩」の清新さを歌壇に注ぎ入れ、やがて来るべき短歌革命の第一石を投ぜんことを希求して、こゝに現代歌壇の全面的究明を開始する」と記した。そして、『アララギ』に対する、アララギズムが小ブルジョア的なものに墮して自己矛盾を起こしている、との糾弾を皮切りに、革新をめざす西村陽吉の歌論を日和見主義と断じ、象徴主義の太田水穂の象徴論を観念論と指摘するなど、既成歌壇に切り込んだのである。この連載は歌壇に波紋を呼び、当時各結社からは批判が相次いだが、特に、斎藤茂吉からの批判は激烈を極めた。茂吉は、『アララギ』の「歌壇万覚帳」（「万覚帳別記」を含む）において、一九二八年五月から、八か月に亘つて執拗に反撃を連載した。それは、茂のみならず、「革命家気取の石樽茂氏の妻」である美代子の歌にも及び、「あぶないものばかり持ちたがる子の手から次々にものをとり上げて、ふつと寂し」など『心の花』掲載の三首（一九二七・一〇）を挙げ、「こんな甘^{あま}つたるい、思はせぶりな、下等極まるものが、どの点で無産者観念体^{あま}だなどと云ひうるのか。近時の『社会観の変革』が一体、どの点でこれらのものに現はれてゐるのか」（一九二八・八）と糾弾した。美代子は当時、これらをプロレタリア短歌として発表したわけではなかったが、狙上の魚となった。

論争の最中、茂は、前川佐美雄や筏井嘉一や坪野哲久等と一九二八年九月、「新興歌人連盟」を結成した。発会式には、この名称の命名者である美代子も含め、各結社を脱した二〇数名が参集した。しかし、機関誌の刊行をめぐり、「政治と文学のいづれをとるかという見解対立から」内部分裂を起こし、解散した。つまり、短歌革新において、「革命は伝統を無視するものからは断じて生まれえない。

伝統を食ひ破つてくる者からのみ生まれる」（短歌革命の進展（その二））と考える茂や前川佐美雄等と、明確なプロレタリア系の坪野哲久等の齟齬が顕在化したと言える。脱退した坪野哲久や渡辺順三、大塚金之助らは、同年、「無産者歌人連盟」を結成、機関誌『短歌戦線』を発刊したが翌年解散し、すぐに、「プロレタリア歌人同盟」を結成した。九月に機関誌『短歌前衛』が創刊された。一方、茂は、翌一九二九年三月に美代子や前川佐美雄と共に歌誌『尖端』を創刊したが、半年後に廃刊した。そして、茂は同年四月に大阪商科大学（現大阪市立大学）に赴任し、一家は茨田郡守口町（現大阪府守口市）に居を構えた。

昭和初期の短歌革新運動の道筋を拓くという役割において、既成歌壇に幾多の波紋を投げかけることに成功した茂であったが、坪野哲久が「階級的な心身なくして何のプロレタリア運動ぞ！」と糾弾したごとく、プロレタリア階級闘争の勢いの前に、階級的身体感覚を持ち得ない茂にとつて、社会変革の一端を担うには限界があった。歌壇を去った茂は、一九二九年八月に『石樽茂歌集』（日本評論社）を刊行し、その跋に「本歌集は歌壇への著者の置き土産だ」と記した。同歌集収録の次の歌に、社会性の導入によつて短歌の芸術革新を志した茂の感性世界が透けて見える。

レーニンもプーシユキンの詩をよみふけりしといふ平凡なこと
になごむころあり

なに階級間の距離？

いま

青空とのすがやかな距離を考へてゐたのに。

美代子は、夫の「新興歌人連盟」の結成を支持し『心の花』を退会して自らも準備の会議に加わった。裕福なインテリゲンチヤの家庭で育った美代子には、この体験はこれまでの自己の生活感覚を一変させねばならないほどの衝撃だったのではないか。美代子は、『尖端』の廃刊までは茂と行動を共にしたが、守口に越してからは自らの意思で「プロレタリア歌人同盟」に入会した。美代子は、守口という環境を得て工場労働者の現実を目の当たりにし、彼らと一体化はできない疎外感を味わいつつも彼らへの想いを歌にしている。このプロレタリア短歌活動の時期の歌群が、「二段階」である。当時の美代子はどのような意識で臨んだのであろうか。

美代子は、一九二九年一〇月号の『短歌前衛』に「たった二三十銭のちがいの特価品を生命がけて買おうとする人々のこの強さはどこから来た⁽⁸⁾」を発表した。例えば、山田あきが、一九三〇年四月号の同誌に、「妻も家も否飯さえ奪われている、だが俺たちには大衆があると同志の晴やかな顔は輝いている」と、同志である労働者への信頼と希望の下に詠んだ歌を発表したように、当時の「プロレタリア歌人同盟」は階級闘争を目指していた集団である。対して、美代子の歌は、余りにも素朴な無産階級への認識の目覚めであった。「巻末に」〔暖流〕によると、我が子をすらかわいがる余裕のない女性たちの存在に気づき、世の中の「不合理が改造」されるまでは「自分ばかりが自分の子供一人を見つめて、家庭愛にのみひたりに切つてゐるのは、すまないことだと思ひだした」ことが、「一番直接に私を新興短歌運動への参加に駆りたてたものであった」という。

新鮮な空気と日光のなかにみすばらしい自分の姿よ 書齋から
出て来た

自分の子には決してさせる日がないと安心して危険な作業の
前を通り過ぎるのか

右の前者の歌は、ひ弱なインテリゲンチヤが、労働者の側に身を置こうと一歩踏みだしたことを詠んでいる。後者は、とまどいの中で自分自身への叱咤や自己を含む有産階級者への憤りを歌にしている。しかし、プロレタリア文学運動の共産主義的な目的を把握できないままに、労働者への同情で彼らを見る空気が、美代子になかったとは言えない。

昭和初期の労働運動の高まりやその流れの中で社会に目を向け、無産階級への生活の実感を伴わないままに運動に参加した美代子には、当時の自己の思想信条を懸けた命がけのプロレタリア運動の活動家たちと歩調を共にすることは、不可能であった。のみならず、一九二八年の日本共産党員の一斉検挙以後、歌壇への官憲による弾圧は苛烈になり、一九三〇年刊行の坪野哲久の第一歌集『五月一日』の発禁処分など、プロレタリア文学活動者は危険に晒された。美代子は、「どこからともわからず、従いかねる過激な指令を受けるに及び」〔五島美代子略年譜〕『底本 五島美代子全歌集』、脱退した、と記している。これは、知らぬ間に党员活動に加担させられ社会的弾圧を受けることへの怯えからでもあり、歌人としての自己の本来との間に広がる齟齬による怯えからでもあったのではなからうか。美代子の歌人としての本然を考える時、注目するべき歌歴がある。

美代子は、一九一七年、一八歳の日記「思ひのま、」（未公刊資料）に、一六歳の年には歌を三〇〇首ほど作り一七歳の頃には四〇〇首余りにさえたたと記しているが、この頃多くの古典に親しみ、「十七の秋辺からは殊に古今集を精読し」深く感銘を受けている。また、「歌を詠みたいなど、思ひ初めたのは勿体ない乍ら全くおかくれあそばした明治天皇と照憲皇太后の御言葉のはしをもれ承はり始めてからの事である。（中略）あれによって私は自分の生まれた国の国柄を知り、深く皇室をうやまひ慕ひまつる感情を育まれたのである」と、歌への関心の出発となった体験を記している。美代子の歌歴に鑑みるなら、美代子の歌心の根底には伝統的和歌があり、天皇制への違和感はない。それ故、それらを根拠にせざるを得ないプロレタリア短歌活動に、理性ではなく、感覚的に一体化できない何かが働いたとしても不思議ではない。

美代子は脱退の代償として作歌活動の断念を決意した。「巻末に」で、「敗北者としての私は、せめては歌といふものからすつかり離れてしまふことによつて、自分の面目ない気持をあらはしたいと思つた。」（『暖流』）と記している。一九三一年、美代子がイギリスから佐佐木信綱に宛てた便りに「今でもあの時の方向は、確かに正しかつたと思ふでございます。悪いのは、自分が信じて選んだ道を、正しいと思ひ乍ら、而も敢て進み通す事の出来なかつた事だと存じます。私はたゞ意気地なく傷ついてしまひました。それは人に傷つけられたのではなしに、自分で自信を失つた時に、自ら傷ついてしまつたのでございます」（『心の花』一九三二年二月号）と、ある社会の歪みの是正を求め悩みながらも、現実の行動においては、同盟の活動についてはいけない美代子であった。美代子は自己の信じ

る道を貫けなかつた自身に自信を喪失し傷ついたという。この純真とも愚直とも言える、面目なさを伴う個人的心情の吐露は、自身の生きる姿勢そのものに対する迷いであり、社会的闘争に直結するものとは考え難いものである。

また、「私はかうした過去の歌屑の葬式を出すやうな気持ちでこの集を編んだ」（『暖流』「巻末に」）と記した。「過去の歌屑」とは、歌を作り始めてから「新興歌人連盟」の結成を経て、作歌活動を断念することになる「プロレタリア歌人連盟」からの脱退に至つた歌群を指す、と考えられる。「菓嶋の家」に象徴される高い知性と教養を備えた教育者である両親の庇護の下での生活が、美代子の胸には走馬灯のように駆け巡つたであろう。夫と共に新しく歩み始めた短歌の世界から追われ、懐疑の淵に沈みこんだこの時期の体験は何に繋がると言えるのであろうか。特に、美代子にとつての「一段階」は歌人としての〈死〉への道筋を辿る〈躰き〉であつたが、あえて歌集に取り上げたことにとどまらぬような意味が見いだせるのであろうか。「一段階」は、美代子にとつて、信綱や茂という歌の導き手との訣別を経て、初めて自らの責任において歌人として社会的自立に踏み出した体験を有している。つまり、歌人美代子にとつてエポックを画する時期のものである。それ故、歌集から外すことのできない重要な意味を持つのである。そして、一九三六年という時代背景を考へるなら、「過去の歌屑の葬式を出す」ことは、その後の自身の歩みがプロレタリア文学活動とは一線を画するものであることを公的に表明する意図を含んでいると言えまいか。美代子が本来の自己の求める歌の世界を展開するためには必要不可欠な意思表示である。美代子は、〈復活〉⁽⁹⁾のために踏まなければならなかつた「明日へ

の「一段階」として、「血となり肉となるべく今後も努力してゆきたい」(『暖流』「巻末に」)と記している。「一段階」は、歌人五島美代子の過去への訣別と(『復活』)の一步を宣言する役割を担って、『暖流』の最後に配列されたと考えられるのである。

三 〈復活〉への一掬の水を求めて

——「滞欧歌鈔」(昭和七・八年)——

作歌活動を退いた美代子は、茂の留学に伴い吾子と共に一九三一年から一九三三年までイギリスを主とする滞欧生活を送った。一九三三年三月は、日本が国際連盟脱退を正式に通告した年である。茂・美代子夫婦にとつて孤立感を抱きながらの異国生活であったが、それ故、より鮮明に日本人である自己のアイデンティティーを自覚し、寂寥を託つ日々であったことが、次の歌から響いてくる。

吾らに邦家あり くにありと思ふ 引きちぎられて来したただの
一部分なり吾らは

また、同年一月から三月まで茂が単身でドイツに渡った時期の美代子の作品に、「ピカデリリの冬」と題する歌群がある。ピカデリリの街角で、異国人の吾子に目を留める娼婦たちとの、子という共通性を介しての束の間の触れ合いであった。次の歌のように、生活のために娼婦に墮しているのである。女性に頼り処のない心細げな素の母の表情に孤独な心が響き合ったり、社会の底辺で生きる生命力の萎えたような孤独な娼婦らの後ろ姿に、世の不条理を感じて憤つたりする美代子の眼差しには、新興短歌運動の頃と共通するも

のがある。

母性の相ふとあらはれてよりどなし 紅粉の底の街娼の顔に
うしろかげ寒き娼婦ら過り来て 世をいきどほる心もつわれ
は

このように、多様な異文化体験を重ねながらイギリスでの生活を終えた一家は、一九三三年五月、美代子の強い希望で一ヶ月間パリに滞在した。美代子はこの間、連日ルーブル美術館を訪れたが、この体験は歌人としての(『復活』)の道を決定づけるものであった。

「晚鐘」は狂人に破られて、いま修理中なりといふ
ここに来れば誰しもきちがひになるならむ 空畏しくも並び
並ぶ名画また名画

と詠んだように、美代子は芸術の力に圧倒され、平常心ではいられなかつたようだ。歌の世界を、創作の喜びを自ら葬つた美代子ゆえに、芸術への尋常ならざる執念が湧き上がり懊悩するさまが見取れる。一九三五年六月号の『心の花』に、美代子は「短歌雑感」を掲載したが、その中で「ルーブルミュージゼの巡礼の後、心に湧き起る感興と、自分を省みてのむなしさ、さびしき、何かしたい―何かに自分をゆだねないではゐられない気もちに転々反側した時、やつぱり思ひあたつて、すがりついたのが歌だつた」と記している。

茂によると、美代子は特にミケランジェロの「瀕死の奴隷」像に

心を奪われ、鑑賞し続けたという。後に次のように記した。

蒼空へも伸びようとす均整とれた肢体が、きつい呪縛のもとに息たえようとす瞬間の恍惚の境である。定型にしばらく、伝統の重さにあえぎながら、「棒しばり」の踊りをおどらうとする「私の短歌」のシムボルである¹⁰。

苦しみ悶えながら息絶えようとする「瀕死の奴隷」像は、それに

抗うように蒼空に向かってきつぱりと顔を上げ、恍惚の様を呈する。シャルル・ド・トルナイはこの「奴隷」像について、「肉体の呪縛に対する、魂のつらく甲斐なき戦いの象徴へと変貌」させ、力強さとしなやかさを併せ持つ調和の取れた青年の肉体を縛っている帯は「魂の呪縛の具現化」と言える、と指摘する。心ならずも歌の世界で黙し異郷にある美代子は、現代詩という表現方法もある中でなお、「定型にしばらく、伝統の重さにあえぎながら」短歌という表現形態を求めた。それは、これまでの生を振り返り、自己の魂の呪縛と共通するものを見出したからではなかろうか。「棒しばり」の踊り」は、狂言「棒縛り」が舞踊化されたものであろう。初演は一九一六年だが、当時世間では新鮮な感覚で受け止められたという。後ろ手に縛られた太郎冠者と棒で両手を縛られた次郎冠者が、不自由なまま互いに酒を飲ませあい、酔った次郎冠者が棒縛りのまま心地よく踊る。美代子にとって、作歌は拘束あつてこそその解放であり、恍惚であつたのだ。美代子は、短歌の様式を踏まえながら、それを突き破って新しい独自の短歌を踊らうと奮い立った。美代子は「瀕死の奴隷」像に、自己の生きるべき道を発見した。『丘の上』（弘文社

一九四八・四）の次の歌に、この像から受けた啓示が歌人美代子の生き方の根底を支えていることが窺える。

しばらくし奴隷の如く人も吾も身を揉み生くれ手には筆もつ

息たえんとするかの奴隷像の美しさは思へわれはも生きむ身を揉み育ち

帰国した美代子を「傷ついたままで」迎え入れたのが、短歌新聞の柳田新太郎であつた。柳田は美代子にとって「復活への一掬の水」（「暖流」「巻末に」）であつた。そして、佐佐木信綱も『心の花』への歌の掲載を勧めた。美代子は短歌掲載の場を得て、「瀕死の奴隷」像と共に歌人として蘇つたのである。

「滞欧歌鈔」を作品の冒頭に配列したのは、美代子が「瀕死の奴隷」像を見つめ続けた一か月の深い芸術体験によって、これまでの苦悩と模索の時期を乗り越え、自身の求める芸術の極致、方向性を確たるものとして掴み得たことを読者に証する抄だからである。歌人としての自己の立脚点を明確にし、帰国後の本格的な創作活動の始動を明白に歌壇に示す必然から生まれた意図的な配列である。そして、そのために踏まねばならなかつた「一段階」を最終部に配列した。なぜなら、〈復活〉は〈死〉の上に成り立つものであるから。

おわりに

以上、本稿で検証したように、第一歌集『暖流』の配列には、美代子の歌人としての〈復活〉への決意表明の意志が込められている。

昭和初期の社会不安の中で参加したプロレタリア文学活動に（躰き）、ひとたびは歌人としての（死）を選択して茂のイギリス留学を機に共に日本を離れたが、国際情勢の悪化から日本人に対する冷ややかな視線を身に受けての滞欧生活であった。深い孤独の中で沈黙し内省を深めていった美代子が、ルーブル美術館で一か月もの間芸術の世界に没入し本物と対峙し続けたことは、特筆すべき体験であった。

特にミケランジェロの「瀕死の奴隸」像との出会いに天啓が閃いたかのような衝撃を受け、自らの溢れ出る芸術世界への希求を実感した美代子にとって、自らが失わせしめた短歌の世界がいかに大切なものであったかを思い知らされたことであろう。この体験で得たものが新生美代子の核となり、以後、美代子を突き動かしてゆく。それ故、（復活）の美代子を表明する第一歌集『暖流』の最初に「滞欧歌鈔」を配したのは必然であった。そして、かつてのプロレタリア短歌活動の足跡を隠蔽することなく最終部に配したところに、美代子の歌人としての矜持をも見ることができるともいえる。（躰き）を明らかにしてこそ、歌人として自己の本来による（復活）の第一歩を踏み出せるからである。

加えて、例えば「一段階」で得たものは、後の、自身がやがて歌うことになった生活の裏付けに根差した「生活短歌」や、「朝日歌壇」の選者として共感を呼ぶ生活者の歌を積極的に採用する姿勢などに活かされ、独自の世界を拓くのに繋がった。また、この両者の間には、「巢鴨の家」に象徴される母によって作られた枠組みや、吾子の誕生による拘束された枠組みの中で生きてきた生、時代の枠組みに拘束された生を背負って生み出された作品群が挟まれている。

今後、稿を改めて論じたいが、『暖流』は、母の歌人、母性愛の歌人と冠される美代子の、近代の母性愛神話では覆いきれない独自の「母性」の歌の原型を包含している。このように、『暖流』には、美代子の重層の世界の萌芽が多々見られる。一九三八年、美代子は茂と共に短歌雑誌『立春』を創刊したが、まさに、美代子の（復活）の選択であった。後に、『暖流』が、編年体で各歌集に組みこまれたのは、歌人としてゆるぎない信念と自信が生まれたからであろう。

注(1) 五島美代子の母の歌に関する評論は、『母の歌集』（立春短歌会一九五

三・七）出版以後に活発に論じられるようになったが、それらは早世した吾子の死を題材とした歌群への言及が主要な意味を持つ

(2) 蔵原惟人「各論 3 文学運動とその理論」（小田切秀雄編『講座 日本近代文学史 第四巻』大月書店 一九五七・二）

(3) 一条徹「プロレタリア短歌運動」（著者代表土屋文明『昭和短歌史—近代短歌史第三巻』春秋社 一九五八・七）

(4) 『大塚金之助著作集第九巻』所収 岩波書店 一九八一・九

(5) 茂が「短歌革命の進展（その一）」で、詩歌は「形象を以て自己の觀念を表現するのだ」と述べていることに対する応酬として用いている。

(6) 五島茂「自伝第四回」（『短歌』一九六九・八）

(7) 坪野哲久「石樽茂と書齋主義」（『短歌雑誌』一九二九・九）

(8) 『暖流』の「一段階」では「唯二十三十銭の差の特価品を生命がけで買はうとする人人のこの強さはどこから来た」と表記。

(9) 『暖流』文末に「で、美代子が『復活への一掬の水』という表現を使っているところから採った。

(10) 五島美代子『私の短歌』柴田書店 一九五七・九

(11) シャルル・ド・トルナイ 田中英道訳『ミケランジェロ』 岩波書

〔付記〕未公開資料は、著作権継承者である五島いづみ氏の了承のもとに引用した。また、「美代子は『定本 五島美代子全歌集』を自分の歌とした」とのいづみ氏の言であり、その重みは十分に尊重したい。本稿では、文学史・短歌史的観点から五島美代子を評価したいという立場で、『暖流』掲載のものを引用した。

本論の内容は、論旨の関係上、拙稿「五島美代子（四）―母と娘のウロボロスの円環―」（『あまだむ』二〇〇五・九）と重なる箇所があることをお断りしたい。

本稿で使用する漢字は原則として現行の字体に従った。引用文の仮名遣いは原文通りである。

受贈雑誌（六）

- | | |
|----------------|-----------------|
| 中央大学国文学 | 中央大学国文学会 |
| 鶴見大学紀要 | 鶴見大学 |
| 鶴見日本文学 | 鶴見大学院日本文学専攻 |
| 帝京日本文化論集 | 帝京大学国語国文学会 |
| 帝京大学文学部紀要 | 帝京大学文学部日本文化学科 |
| 東海学園言語・文学・文化 | 東海学園大学日本文化学会 |
| 東京女子大学日本文学 | 東京女子大学日本文学研究室 |
| 東京大学国文学論集 | 東京大学文学部国文学研究室 |
| 同志社国文学 | 同志社大学国文学会 |
| 同志社女子大学日本語日本文学 | 同志社女子大学日本語日本文学会 |
| 東北文学の世界 | 盛岡大学文学部日本文学科 |
| 徳島大学国語国文学 | 徳島大学国語国文学会 |
| 都大論究 | 東京都立大学国語国文学会 |
| 名古屋平安文学研究会会報 | 名古屋平安文学研究会 |
| 南山大学日本文化学科論集 | 南山大学日本文化学科 |
| 新潟大学国文学会誌 | 新潟大学人文学部国文学会 |
| 二松 | 二松学舎大学大学院文学研究科 |
| 二松学舎大学人文論叢 | 二松学舎大学人文学会 |
| 日本近代文学館年誌 | 日本近代文学館 |
| 日本研究 | 国際日本文化研究センター |
| 日本語文化研究 | 日本語文化研究会 |